

精神科医療における多職種間連携

—A 病院の看護師から見た多職種間連携を促進するもの
阻むもの—

新潟医療福祉大学看護学科 金谷光子

杏林大学 長谷川利夫

新潟医療福祉大学 伊東正裕・松本京介・三澤寿美

近藤あゆみ・相田陽子・渡邊良弘

黒川病院 河内学・桐生敏行

【背景】

精神科の治療形態が入院から外来へと大きく変わりつつある現在、それぞれの病院・施設は患者が退院し、地域で生き生きと暮らしていくための治療やケアの方略をもたなければならぬ。そのために、精神科医療における多職種間の連携は必須である。

しかし、医療における専門職間の連携は必須と言われながらも実際には、知識や問題解決能力の差、また連携をすることの意義について温度差がある場合、その連携は困難を伴う。さらに、精神科病院の多くが郊外や山里にあることから、その地域の特性や文化に大いに影響を受ける(Spradely, 1980)。

本学の心の健康支援研究センターが2007年度から看護スタッフ教育に関わってきたA病院は、B県の山里にあり、開院以来、近辺に住む人が勤務し、かつ患者の多くもまたその土地に生まれ育った人であるという背景を持っている。今、本A病院は患者の退院に向けて多職種間連携を模索している。

A病院のもつケアの特性は家族的であり、周囲の環境同様、病院の時間はゆっくりと流れている。しかし、一方で、この家族的なケアは、患者が本来住んでいた地域へと返していく力にはなっていないことも多い。

そこで、A病院における多職種間連携を推進する上で、各専門職が連携を推進するもの・連携を阻むものについてどのような認識を持っているのかについて、今回はケアの要である看護師の視点から考察することとした。

【目的】

本研究の目的は、A病院における多職種間の連携を促進するもの、阻むものを明らかにすることである。今回は看護師からみた視点について述べる。

【方法】

- 1) 研究デザイン：質的帰納的研究である。
- 2) 研究協力者：A病院病棟看護師長5名である。
- 3) データ収集方法：5名の研究対象者に対するグループによる半構造化面接とし、①日ごろのそれぞれの看護の在り方について、②多職種連との連携を促進する要因・阻む要因について自由に話してもらった。インタビュー内容は研究協力者の同意を得てICレコーダーに録音し、逐語録を作成し生データとした。
- 4) 分析方法：研究者10名で生データを精読した後、研究協力者の発言が意味するものについて文脈に沿いながらディ

スカッションを重ね、生データから同じ意味を呈するものをサブカテゴリーとして抽出し、さらに抽象化を重ね、カテゴリーを導き出した。

- 5) 倫理的配慮：インタビューに際しては、強制力が働かないように研究協力者へのアプローチには留意し、研究協力者の自由意思に基づく自発的参加を保障した。また、研究に際しては、新潟医療福祉大学倫理委員会の承認、および該当病院所属長の承諾を得た。

【結果】

連携を促進するものには、【連帯感】【役割の明確化】【リーダーシップ】【積極的なコミュニケーション】【看護師の専門的知識と主体性】【他職種の専門性に対する理解と肯定的な感情】【患者に対する思い】の7つのカテゴリーが抽出された。また、連携を阻むものには、【看護師の専門性に対する知識不足】【他職種の専門性に対する認識不足】【コミュニケーションを取る能力の不足】【不平等感】【職業倫理の低さ】【他職種に対する否定的な感情】【マンパワー不足】【病棟看護師長としての力量不足】の8つのカテゴリーが抽出された。

以下、【カテゴリー】[サブカテゴリー] <データ>として表示する。

【考察】

A病院は、急性期の治療病棟開設や患者の退院促進を掲げるまで、従来の家族的ケアにそれほど違和感を持っていない職員が多かったと思われる。しかし、精神医療の流れの変化や患者のQOLが重要視されるようになってきた現在、多くのスタッフは、それぞれのケアの視点を変化させざるを得ない岐路に立っている。

今回のインタビューを通して、看護師の感じていた【不平等感】や【マンパワー不足】【他職種に対する否定的な感情】【コミュニケーション不足】は、患者のQOLを高めたいという思いの裏返しであることが理解された。すなわち、研究協力者たちは、【看護師の専門性に対する知識不足】や看護師の【コミュニケーションをとる能力の不足】【多職種の専門性に対する認識不足】が、【他職種に対する否定的な感情】につながり、連携の足かせとなっていたと認識していた。

A病院では、ようやく多職種間連携の重要性と意義に気づき始めてきている。多職種間連携には、まず、専門職としての高い知見を持つことが基本である。その上で他の職種の専門性を理解しつつ、互いが互いから学びあうという積極的であり、かつ謙虚な姿勢が重要(大島, 2007)であるが、もともと謙虚な姿勢を持つ文化的背景に住み込んでいたスタッフたちにとって、多職種間連携は実現性の高いものであるように思われる。

*引用・参考文献

1. 大嶋伸雄・高屋敷由美・藤井博之：「英国における保健医療福祉連携教育 (IPE) の現状と背景」. リハビリテーション連携科学 8(No1) : 10. 2007.
2. James P. Spradley 『Participant Observation』 WADSWORTH Thomson Learning, 1980.